

1. 異業種交流を再評価すべき時代を迎えた

中小企業には役員が複数いても、本当に経営しているのは、ただ一人ということが多く、経営者には、常に意思決定の重圧がかかり孤独です。そこで、同じ

経営者という立場にある者と情報交流して、経営を真摯に考える場を持つ必要があります。経営とは、時代の変化を体感して、それに対応していくことです。企業内で独りよがりにならないように、互いにアドバイスしあえる経

営者仲間を持つことが重要です。

中小企業政策において、異業種交流を「過去のもの」「中小企業の親父の飲み会」という評価をする人に会うことがあります。しかし、中小企業経営者は、シャイで、人見知りで、コミュニケ

異業種交流を再評価

～異業種交流と産学官連携の融合～

電気通信大学 産学官等連携推進本部
特任教授 竹内 利明



ーションもあまり得意ではない人が、実は結構多いと感じています。特に、これからの日本経済を背負っていかなくてはいけない、開発型の技術系経営者に多いようです。異業種交流は、心を許した仲間がいて、そこを仲介して多くの方と交流することが可能で、そこから、自社の開発商品のヒントを得ることや、開発の質やスピード向上という成果が生まれています。これは、共同開発の成果より、経済効果が大きく重要だと思います。独創的な技術を持つベンチャー・中小企業の育成が重要な政策課題となっている日本の創業、中小企業支援策において、異業種交流を再評価すべき時代を迎えていると思います。

2. 中小企業の産学官連携

電気通信大学は、平成15年度を基準に平成16年度から3年間に共同研究を2倍にするという目標をたて、事業計画を立案して実行してきました。教員と事務部門が一致協力して取り組んだ結果、共同研究は、件数、金額ともに目標を大きくクリアして、約3倍になりました。これは、全国の大学でトップクラスの伸び率を達成したことになります。

電気通信大学では、産学官連携を促進するために、新たに6つの事業を企画しました。今回はそのなかのひとつ「研究室紹介：OPAL-RING」について紹介します。

大企業や研究開発型企業の

研究者と大学教員は、学術研究団体（学会）を通じて人脈を構築して、必要に応じて共同研究を進めてきました。共同研究を増やすには、学会で出会うことのない異分野の研究者や、学会には参加していない中小企業者に電気通信大学の研究内容を知っていただく必要があると考えました。しかし、これまでの研究紹介は、専門性の高い教員が、自ら書いていましたので、中小企業者から見ると難しく、大学は敷居が高いと言われる原因のひとつになっていました。

そこで、分かりやすい研究紹介を目指して、プロのライターとカメラマンが研究室を訪問取材して、その分野の技術の専門性がなく

でも、研究内容をある程度理解できる冊子を作成しました。これにより、異分野の技術を自社の商品や技術に生かす、すなわち異分野の大学の技術と企業の異業種交流が生まれることを目指しました。平成16年度の初版は49研究室を掲載、平成17年度に77研究室、平成18年度は95研究室を掲載するというように、学内の協力も年毎に進んでいます。下記のウェブサイトに掲載していますので、ご意見をいただければ幸いです。

<http://www.kikou.uec.ac.jp/kenkyushitsu-index.htm>

3. 中小企業の新たな産学官連携を目指した企画

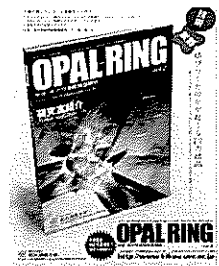
東京異業種グループ連絡協議会は、平成18年度事業として、大学で商品化直前にある技術に、中小企業が協力して、商品化の成功を目指す産学官連携イベントを中小企業異業種交流財団に提案して、「2007先端ロボット技術産学連携フォーラム」を実現しました。

東京理科大学、芝浦工業大学、電気通信大学の協力を得て、商品化しているか、商品化直前のロボット研究者に参画していただきました。最初に大学の教員からどのような技術を持つ企業の協力を得たいのかを聞いて、その内容をチラシに記載して案内しました。

企業には、「求む、貴社の技術!!」「品質・性能向上・価格低減等」「精密部品加工・電



2007先端ロボット技術
産学連携フォーラム



研究室紹介冊子
「OPAL-RING」

子回路設計製作・ソフト開発・センサ・機構部品・安全性」というキャッチコピーで参加を呼びかけました。

「2007全国異業種交流・新連携フェア」のイベントとして開催したので、広い会場を確保できましたが、事前の参加申し込みは60数名で、初めての試みだけにPRが十分に浸透していないせいか、少し少ないと心配しました。しかし、当日、展示会来場者に、積極的に呼びかけたところ、300部用意した資料が全てなくなり、事前に用意した椅子が足りなくて、急遽追加することになりました。アンケート結果を見てもたいへん好評でした。来年以降継続して開催する方法を検討したいと思います。

今後、中小企業との産学官連携を推進していくうえで、大学のシーズを提供して、新技術や商品を開発することを目的とした産学官連携に加えて、中小企業の実績・技術・技能を活かした連携や、中小企業が得意な「品質・価格・納期」を大学が積極的に活用する産学官連携等、多様な取り組みが必要だと思います。

「2007先端ロボット技術産学連携フォーラム」は、インプレスのウェブサイト「Robot.Watch」に詳しく掲載されていますので、ご参照いただければ幸いです。

<http://robot.watch.impress.co.jp/cda/news/2007/03/06/391.html>

(平成19年3月10日現在)

Profile

竹内 利明(たけうち としあき)
電気通信大学 産学官等連携推進本部 特任教授

【略歴】1952年東京都出身。76年青山学院大学理工学部経営工学科を卒業。自動車部品会社勤務を経て、91年有限会社陽明エンジニアリングを創業。2000年から、電気通信大学共同研究センター客員助教授、03年に同客員教授。03年、『創業・ベンチャー国民フォーラム起業支援家部門奨励賞』受賞。05年から現職。専門分野は、中小企業経営論・起業家教育・キャリア教育。

中小企業庁「中小企業関連研究開発制度評価検討会」委員長ほか、多数歴任。